日明交流と天界寺

——日本国僧宗嶽等についての一考察——

竹　貫　友佳子

はじめに

室町期における対外関係についてみる時、足利義満による日明交渉は注目される。その足利義満が初めて遣明使を派遣したのは、応安七年（一三七四）で、明では洪武七年にあたり、義満が将軍に就いてから、そして明では洪武帝が即位してから七年目となる。

この足利義満と洪武帝は、ともに対外交渉に乗り出すことになる。洪武帝は西域などに積極的に遣使を派遣し、また日本にも遣使を遣わしている。[1] 一方、足利義満も明との交渉に積極的であったことは周知の通りであろう。

この日明交渉において、足利義満の遣明使に注目すると、日本の遣使として派遣され、外交交渉に活躍したのが、五山の禅僧達であり、彼らのもった優れた漢文作成能力や、交渉能力の高さなどが先行研究により指摘されている。[2]

近年では、伊藤幸司氏[3]、橋本雄氏[4]、榎本渉氏[5]らにより、それぞれに独自の視点から日明交渉、日明貿易における日明の禅僧の交流や、明国での待遇、貿易品など、禅僧等の動向に注視した日明双方の対外関係の詳細な研究が進められてきている。

特に、最近の研究として注目されるのは、上田純一氏による研究である。[6] 日明交渉の初期の段階である足利義満による遣明使、義満の対外交渉政策、さらに足利義持の外交などについて、日明双方の禅宗界の動向と併せて見ることでより明確になる点が多くあることを示唆された。上田氏は当該時期における日本、明、そして朝鮮の禅宗界の動き、また禅僧等の活躍を的確に捉えられており、中世日本の対外交政策における室町幕府の動き、またそれと密接に関係する禅僧等の動向、役割の重要性がより一層明確なものとなったと言えるだろう。

本稿では、これら先行研究に多くを学びつつ、日明の対外関係の初期段階、特に一三七〇年代における文化的な交流に注目してみたいと思う。その時代を区切るのは、日明双方に関わる胡惟庸・林賢の事件（洪武一三年・一三八〇年頃発覚）を契機として、国交のありかた、また中国の禅宗界において変化が見られるからである。

この事件の後に、日明の関係が断絶することになるが、[7] 明の仏教界に注目すれば、洪武十五年に僧録司が置かれるなどの統轄制度の変革があるなど、[8] この事件そのものはもちろん、日本との関係性を紐解く上で重要である。さらに中国禅宗界にあっては、その門派勢力に変化が見られることも指摘されており、[9] 日明双方の交流にも大きく影響を及ぼすものであるといえる。

そこで、本報告では、この事件以前の日明交流に注視したい。具体的には日明双方の禅僧による交流の実態や、多くの日本僧が滞在した南京の天界寺、また当該時期の天界寺の住持であった季潭宗泐と日本僧との交流について考察してみたい。

第一章　南京天界寺住持季潭宗泐と日本僧への対霊小参

一、天界寺

入明した日本からの遣使等が接待された場所に、南京の天界寺がある。天界寺は、元代では大龍翔集慶寺の寺名をもった大刹であった。それを、洪武元年に「大天界寺」と寺号が改められ、さらに善世院が設置されるなど、禅宗寺院の、ひいては仏教界を取り締まる最高寺院（寺格は五山之上）であった。[10]

天界寺は、明の首都南京に寺格に相応しい寺域をもった寺として存在し、[11] 日明交渉の窓口として、[12] また蕃使や蕃客に対し、事前に朝貢に関する儀礼のスクーリングを行う場所としても重要な役割をもっていたことが指摘されている。[13]

『太祖実録』の洪武七年六月乙卯条では、「〔乙卯〕日本国僧宗嶽等七十一人、遊方至京、上諭中書省臣曰、海外之人、慕中華而来、令居天界寺（後略）」とあって、日本から宗嶽という僧侶をはじめ七十一人が南京に到着し、彼らが天界寺に滞在していることが記されている。七十一人という人数を収容できるほど天界寺の規模が大きかったことが伺われる。

二、季潭宗泐

龍翔寺が天界寺に改名された後、義満による第一回目の遣使が派遣される頃までの天界寺の住持となっていたのは、覚原慧曇、白庵力金、そして季潭宗泐である。特に日本からの遣明使が派遣された洪武七年時に住持であったの

は季潭宗泐である。

この季潭宗泐は、龍翔寺開山の笑隠大訢の法嗣で、洪武元年（一三六八）に杭州中天竺寺に住し、その後、洪武四年に住持に就いた白庵力金の後をうけて天界寺の住持となった。[14] その後、西域に遣使として赴くなど国内外双方で活躍した禅僧であった。

季潭宗泐へ参禅した日本僧としては、絶海中津が特に知られているが、他にも独芳清曇、太初啓原、無初徳始らなどがいる。[16]

この季潭宗泐が、天界寺の住持として日本僧等を受け入れていたことを示す例の一つとして注目されるのは、洪武七年に日本から明へと渡った僧侶らのうち、渡海中に、また天界寺までの道中で亡くなった僧等のために対霊小参を修していることである。

三、入明僧のための対霊小参

洪武七年に天界寺住持の季潭宗泐が日本僧のために修したのが「日本比丘浄業請為亡僧周寂等対霊小参」である。

日本比丘浄業請為二亡僧周寂等一対霊小参

道無二方所一、何分二彼此之殊一、法離二見聞一、寧住二去来之相一、若能頓二捨従前逆順之縁一、発二起勇猛精進之心一、不レ顧二危亡一、不レ憚二寒暑一、行脚参方、親二近知識一、究二明此事一、期二於必悟一、須是慷慨特之士、方能如レ是獨脱超群、慈明易服二軍伍一往参二汾陽一、先行不レ到、雪峰三登二投子一、九到二洞山一、末後太過、所以道、四海

共二参尋一、十方同二聚会一、路逢二達道人一、不下将二語默一対上、今日本国諸比丘周寂等十人、跋二渉鯨海一、触二冒酷暑一、遠自二其国一来レ此参禅、道途辛苦因致レ斃、可レ謂為レ法忘レ躯、但其不レ得下親二近知識一参中叩此事上、有レ志弗レ就、良可レ惜也、然而於レ身無レ所レ取、於レ修無レ所レ著、於レ法無レ所レ住、過去已滅、未来未レ至、現在空寂、当二此之際一、以レ何為レ身、以レ何為レ心、以レ何為レ佛、以レ何為レ祖、以レ何為レ禅、以レ何為レ道、拈二主丈一、卓一下云、千古万古黒漫々、塡レ溝塞レ壑無二人会一、復説レ偈曰、

善哉諸比丘、為レ法共忘レ寿、鯨波既不レ驚、酷暑復何有、
眞参無レ所レ参、眞叩無レ所レ叩、弥勒棲閣前、文殊是初友、
心々自融通、法々速成就、無レ生亦無レ滅、非レ浄亦非レ垢、
設参用資厳、應時聊納レ祐、一句恰相当、三々不レ成レ九、

亡僧十人

周寂・正肇・至道三人、到二天界一亡、用怡・一桂・善資三人、海舟中亡、良穂・建萃二人、明州正慶寺亡、明輔、明州天寧寺亡、浄見、越州舟中亡、因二業上主請一、書二小参一、

洪武七季七月十有一日　天界住山　宗泐書[17]

この対霊小参について、玉村氏は、「比丘浄業」が中巌円月の法嗣の子建浄業という禅僧であることを指摘され、また亡僧十人の経歴は不明としながらも、そのうちの浄見については、子建浄業と同様に中巌円月の弟子であることを明らかにされた[18]。その子建浄業について、さらに村井氏は、彼の入明時期を検討し、応安六年（一三七三）時には日本におり、入明はそれ以後であることを指摘された。子建浄業はまさに義満の最初の遣明使である「浄業」その人

であることが明らかとなっている。[19]

先の対霊小参との確認のために、『太祖実録』洪武七年六月乙未条をみると、「〔乙未〕日本国遣僧宣聞渓・浄業・喜春等来朝」とあり、日本国から遣わされたのは、聞渓円宣、子建浄業、喜春らの一行であることがわかる。

対霊小参をみてみると、題にあるように、子建浄業が天界寺住持である季潭宗泐に依頼して記されたもので、渡海中、また道中で亡くなった十名の僧らの名が書き上げられている。彼らの詳細を知ることは難しいが、依頼した子建浄業が遣明使としての役割を担った人物であったことからすると先行研究の指摘にあるように遣明使に同道した僧等であったと見ることができる。しかし、季潭宗泐が文中に記している「遠自其国来此参禅」の文言は看過できないと思われるのである。

『太祖実録』の記述からは彼らの居所がどこであったのかは不明であるし、またその後の動向についての詳細は知ることが出来ない。しかし先行研究で指摘されたような天界寺のもつ役割、また季潭宗泐が記した対霊小参から、日本僧らが天界寺に居たことや、渡海僧に対しても葬礼の儀式が行われることがあったことなどを指摘することができる。

これらのことから、聞渓円宣、子建浄業、喜春らは、遣明使としては受け入れられず、正式な外交交渉には至らなかったが、禅僧として参禅のために入明したということで受け入れられたのであろう。明側の外交交渉の窓口としての役割を担っていたとはいえ、五山之上の寺格である天界寺に入ることが許され、その住持たる季潭宗泐との面会、それに加えて、亡僧への仏事が行われ、季潭宗泐によって対霊小参が作成されたことは、日明の文化交流の点で非常に重要な意味をもつものであったといえるだろう。

第二章　季潭宗泐と大応派

一、洪武八年の季潭宗泐詩文

季潭宗泐は、詩文の才に長けた禅僧[20]であり、日本からの参禅の僧も多くおり、彼の詩文を贈られている日本僧も散見する。

先に見た「日本比丘浄業請為亡僧周寂等対霊小参」は、季潭宗泐により書されており、洪武七年（応安七年・一三七四年）七月の日付をもっている。これは、日本からの参禅の徒でもあり、なおかつ遣明使であった禅僧たちへの小参という、二つの側面から重要となる詩文といえる。

この小参に加えて、当該年頃に季潭宗泐が日本僧へ贈った書が伝来していることは看過出来ないだろう。その一つは、伊藤幸司氏が紹介、指摘された独芳清曇のための賛文である。[21]

独芳清曇は豊後の人で、大鑑派に属する。入元経験をもち、用章廷俊や季潭宗泐などに歴参した禅僧である。[22]この独芳清曇のために作成された賛文とは、独芳清曇の頂相に付された賛文のことである。

その中で、日付が洪武八年（永和元年・一三七五）四月朔日であること、「天界全室叟宗泐」が書したことが記されていること、そして独芳の弟子霊昂の依頼であることが記されていることから、先にもみた洪武七年に入明した遣明使ら一行との関連性、そして遣明使の南京滞在期間についても、少なくとも賛文の日付にある洪武八年四月であることを指摘されているのである。[23]遣明使の一行の規模、同行を検討するにあたり、重要な手がかりであるといえるだろう。

二、南浦紹明語録の叙文

この指摘をふまえつつ、今ひとつ当該時期の季潭宗泐の日本僧への書で注目したいのが、南浦紹明の語録の序文である。

日本国建長寺明禅師語録叙

吾仏、以二教外別伝之旨一、付二大迦葉一、廿八伝至二菩提達磨一、当二梁武帝時一徠二中国一、以二無上心印一、授二可大師一、而中国始有二禅宗一、自レ後派別支分弥布二華夏一、唐宋之間号為二極盛一、日本国遠在二大海之東一、雖三自レ唐以徠若二空海・最澄・奫然・寂照之流一、但徠二中国一伝二教乗一而已、至二宋南度二千光禅師栄西者、徠参二天童虚菴敞公一、得二禅学一以帰、日本之有二禅宗一、則自二西公一始、而覚阿徠参二霊隠瞎堂遠公一、妙悟心要、亦言彼国未レ有二禅学一、由レ是而言、則西与阿、蓋同時云、厥学レ禅自二中国一而帰者、不レ可二勝計一、至レ今彼国禅宗大盛、凡叢林典礼、一放二中国之制一、茲読二建長寺円通大応国師明公語録一信然、公得二径山虚堂愚公之道一、帰二化其国一、四遷二名刹一、大敷二玄旨一、学徒駢集、而王公貴人入室問道者甚衆、蓋其履二践真実一、開二示学者之語一簡古厳整、無二毫髪虚偽一、真一代宗師也、嗟乎中国之於二日本一、同在二閻浮提之内一、同一天地、同一日月、雖レ有二山海之限一、而人物性情、与レ夫所レ得二道徳之懿一、其有二不同者一乎、観二公之言行一卓異如レ此、古人所謂何地無二才良一有レ徴矣、三復二感歎一、乃叙二其録之首一、

洪武八年倉龍乙卯五月十有九日戊寅

天界善世禪寺住持天台釈宗泐叙[24]

「日本国建長寺明禅師」とは、南浦紹明（大応国師）の事である。南浦紹明は駿河国の人で、建長寺で蘭渓道隆に師事した後、正元元年（一二五九）に入宋しており、そこで虚堂智愚に師事した。文永四年（一二六七）に帰国し、文永七年（一二七〇）に筑前の興徳寺に住持し、文永九年（一二七二）に筑前の崇福寺に住持した。建長寺の住持となったのは徳治二年（一三〇七）である。[25]在宋中の南浦紹明に関して、虚堂智愚に師事したこと、[26]動向の詳細についても明らかにされている。[27]

その南浦紹明語録序文の末には「洪武八年倉龍乙卯五月十有九日戊寅」の日付と「天界善世禪寺住持天台釈宗泐叙」の署名があり、注目すべき点である。

日付は、独芳清曇の頂相の賛文の日付より一ヶ月ほど後のもので、天界寺住持季潭宗泐の作成であることがわかる。そして「茲読建長寺円通大応国師明公語録」とあり、季潭宗泐が南浦紹明の語録を読んだうえで序文を記した事が記されていることも看過できない。

南浦紹明の語録については、侍者の祖照等が編集しており、その後、応安五年（一三七二）十二月に、当時京都の龍翔寺住持となっていた滅宗宗興等によって刊行されている。[28]

『大応国師語録』の末にはその刊行に携わった僧等の名が記されており、

時応安五年歳次壬子冬十二月十五日

西京龍翔禅寺住持法孫比丘宗興命工入梓
前妙興禅寺住持法孫比丘性守助縁
前真如禅寺住持法孫比丘宗任同助
築州聖福禅寺住持法孫比丘宗越同助
前崇福禅寺住持法孫比丘宗璨同助[29]

とあり、何れも南浦紹明の法孫らの名が記されている。特に「宗興」は滅宗宗興で、応安五年時には十一月に東福寺にて前堂首座を三日の間つとめ、その後、筑前の聖福寺の住持に請われるも辞して、山城の龍翔寺に住しているので[30]、まさにその時に師である南浦紹明の語録の刊行をしたことになる。また、大用宗任[31]、象外宗越[32]、玉林宗璨[33]といった南浦紹明の法孫らの協力があったことがわかる。

南浦紹明の語録が、どのような経緯で季潭宗泐の目に触れることになったのか、また序文が書されることになったのか、その詳細を知ることは難しい。が、少なくとも、この応安五年の日付をもった語録を彼が見た可能性は、全く無いとはいえないだろう。また、その際、この語録を持参して入明できるのは、おそらく南浦紹明の法孫たち、つまり大応派僧であることは想像に難くない。

また、南浦紹明らと季潭宗泐の門派に注目すると、季潭宗泐は大慧派であり、大応派は松源派につながる法系である。南浦紹明が虚堂智愚の法嗣であり、松源派に連なる門派でありながら、大慧派に連なる季潭宗泐が序文を記していることは看過できない点ではないだろうか。

三、入元、入明の大応派僧と大慧派との関係

季潭宗泐が南浦紹明の語録に書した叙文とともに注目したいのが、『円通大応国師塔銘』[34]である。これを撰したのは「杭州路中天竺天暦万寿永祚禅寺住持廷俊」つまり明僧の用章廷俊である。

用章廷俊による塔銘が書された経緯については、次のような事情があった。南浦紹明の法嗣の月堂宗規が撰した南浦紹明の「行状」を月堂宗規法嗣の無我省吾が持参して入元し、至正二十五年（一三六五）に中天竺寺住持の用章廷俊に塔銘を依頼したことによることが指摘されている。[35]

用章廷俊（一二九九～一三六八）は、大慧派笑隠大訢の法嗣であるので、季潭宗泐とは兄弟弟子である。[36]

また、入元した無我省吾は、月堂宗規の法嗣である。はじめ南浦紹明の法嗣である宗峰妙超（大燈国師）のもとに参じた後、龍翔寺に住していた月堂宗規に参じている。[37]無我省吾は二度の入元経験をもち、二度目に入元した際には帰国することなく、明国で入滅している。

無我の一度目の入元[38]は、貞和四年（一三四八）春で、『延宝伝燈録』などの記述をみると、承天寺の仲銘克新、浄慈寺の用章廷俊、霊隠寺の用貞輔良、見心來復に参じ、さらに、楚石梵琦、了庵清欲、月江正印に参じ、径山で虚堂智愚の塔を拝している。帰国の際には楚石梵琦と季潭宗泐から詩をおくられている。[39]

ここで注目したいのが、無我が歴参した禅僧等の門派である。仲銘克新、用章廷俊、用貞輔良、楚石梵琦は大慧派で、見心來復、庵清欲、月江正印は松源派である。[40]

無我省吾は宗峰妙超に参じ、月堂宗規の法嗣となっているので、大応派の僧である。この大応派は、派祖である南浦紹明が虚堂智愚の法嗣であり、その虚堂智愚が松源派祖の松源崇岳の法嗣であることから、松源派に連なる門派に

属することになる。

留学僧の歴参においては、門派の別によらず、多く高僧らに参禅することが行われるので、松源派大応派の無我省吾が、大慧派の禅僧に参禅することは不思議ではない。季潭宗泐などは「詩文の大家」ともいわれるような詩文に長けた禅僧であったことが知られている。[41] このような中国の禅僧達のもとへ日本僧らが歴参し、交流が行われていたのであり、門派の別にとらわれない禅僧達による文化交流が盛んであったことを知る。その中で、大応派の僧等が、彼らが連なる松源派の僧はもちろん、大慧派の僧等へも歴参していることから、南浦紹明の塔銘や語録序文を大慧派僧の用章廷俊や季潭宗泐に依頼した背景に、大応派と大慧派の密接な関係性が見えてくるのである。

第三章　洪武七年の入明僧たち

これまで、洪武七年、洪武八年の時期に、南京天界寺の住持である季潭宗泐が日本僧に対して作成した詩文、賛文に注目してきた。これにより、南京の天界寺において入明僧らに対する葬礼の儀式が行われ、その住持たる季潭宗泐によって対霊小参が記されるなど、日本僧達が非常に丁寧な待遇をもって受け入れられていたことが示されている。

特にこの対霊小参については、洪武七年（一三七四）に室町幕府将軍足利義満による最初の遣明使の派遣と時期を同じくしており、なおかつ遣明使の一人である子建浄業の依頼によるものであることから、最初の遣明使の一行の構成員とされてきた。そのこと自体は正しいであろう。

だが、この洪武七年頃にみられる日本からの入明僧たちの多くを、全て遣明船に乗船して渡海したと考える必要はないように思われるのである。

従来の研究においても、この洪武七年頃における入明僧については、ほとんどを遣明船にて入明したと捉える考え

方と、遣明船での入明のほかに、それとは別の方法で入明した僧達がいたと捉える考え方に大きく二分することができる。結論を先に述べるとすれば、筆者は後者の考え方、つまり遣明船とは別に入明した一行がいたであろうと考える。

改めて『太祖実録』洪武七年六月における、日本からの僧達が入明した記述が見られる箇所をあげてみよう。

〔乙未〕日本国遣僧宣聞渓・浄業・喜春等来朝、（中略）是時、其臣有二志布志島津越後守臣氏久一、亦遣二僧道幸等一、進二表貢馬及茶布刀扇等物一、上以氏久等、無二本国之命一、而私入貢、仍命却レ之、而賜二道幸等文綺紗羅各一匹一、（中略）先是、上賜二日本高宮山報恩禅寺僧霊枢袈裟一、至レ是、霊枢亦遣二其徒霊照一謝恩、貢二馬一匹一、詔賜二霊枢衣履及文綺帛各二匹、霊照銭一万文綺帛各一匹僧衣一襲一、遣還、

〔乙卯〕日本国僧宗嶽等七十一人、遊方至レ京、上論中書省臣曰、海外之人、慕二中華一而来、令レ居二天界寺一、人賜二布一匹一為二僧衣一、(42)

洪武七年六月乙未朔条では、日本からの入明した僧達の名がいくつか散見する。まずはじめに見られるのは、宣聞渓（聞渓円宣）、浄業（子建浄業）、喜春らである。これらは、これまでにも述べてきたとおり、遣明使としての来朝であり、対霊小参の記述と併せて遣明使の一行が知られている。この記事からは、彼ら一行がどこに居していたのかはわからないが、対霊小参から少なくとも翌七月には南京天界寺にあったことがわかる。

次にみられるのが、島津氏久から僧道幸等が遣わされており、それは「私入貢」であることが記されている。さらに日本の報恩禅寺僧霊枢によって霊照が遣わされており、その理由は霊枢が袈裟を賜った御礼としての入明であっ

た。この日の記述に記されている日本からの入明僧は、大きくは三つのグループとして見ることができ、この記述から、日本国遣使であるのは、はじめに名が出てくる聞渓円宣らだけであることは明らかであろう。

そして、その二〇日後にあたる乙卯条では、日本国僧宗嶽等七十一名が南京に至り、天界寺に居すこととなった。いったいこの宗嶽等はどのような一行であったのだろうか。

『太祖実録』洪武七年六月の乙未条と乙卯条に見られる入明した僧等で、特に乙卯条にみられる宗嶽等七十一人の僧達についての見解は大きく二つに分かれている。

一つは、乙卯条にある「日本国僧宗嶽等七十一人」が乙未条に見られる聞渓円宣ら遣明使らとともに遣明船に同船し、天界寺に入った一行とする見解である。[43]

それとは別の見解では、宗嶽らは聞渓ら遣明使とは別に入明した一行として捉えられている。[44]

確かに、前者が指摘するように、遣明使も宗嶽等も同時期に天界寺に留まっていると思われるが、彼らを必ずしも同じ一行としてみる必要はないのではないかと思われるのである。

まず、この『太祖実録』洪武七年六月にある記述において注目できる点は、遣明使らと宗嶽等の入京したことが記されている日付に開きがあることである。遣使らのことは「乙未」に記され、宗嶽等は「乙卯」に記されており、この間二〇日程の差があることは看過できない。

また、記述においても、聞渓円宣らは「日本国遣僧」とあり、日本国の使いとしての役割をもった僧侶であることが明確である。その一方で、宗嶽らは「日本国僧」で「遊方至京」とあり、宗嶽等は日本国からの僧侶で、参禅を目的に南京に至った者たちであることが記されており、ここからは遣使として入京した僧侶として読み取ることはできないのである。これらからすると、宗嶽等を必ずしも遣明船に乗船した一行として捉える必要はないのではないかと考える。

また、天界寺が首都南京における対外交渉の際に重要な役割を担った禅宗寺院であったことは、先行研究により指摘されている通りであり異とするところではないが、その一方で、対霊小参にみられるように、日本から「参禅」のために入明した僧等の葬礼が行われていることに留意が必要であろう。

対霊小参を依頼した子建浄業は遣明使の一員ではあったが、天界寺住持季潭宗泐の門流と同じ禅僧であったし、また、葬礼をする際においても、季潭宗泐の書からは、遣明使僧としてではなく、「参禅」の僧達に対する葬礼であることが読み取れるのである。このように見ると、天界寺は、参禅の徒に対しての接待という、本来の禅寺としての一面も有していたことが伺えるだろう。

この点を踏まえれば、宗嶽等はまさに「慕中華而来」僧達であり、やはり遣明使という意味合いはそれほど強くない。たとえ遣明使でなくとも、南京に到着した入明僧たちは、対外交渉の拠点になった天界寺に留められることとなったから、彼らの中には、天界寺において、季潭宗泐やそこに留まって参禅修行する日本の留学僧らと、面会することを目的に入明した僧等がいたと考えることも可能ではないかと思われる。

では、改めて「宗嶽」をはじめとする七十一人の日本僧たちはどういった一行だったのであろうか。詳細を知ることはできないが、一つの可能性としてあげたいのは、先にみた南浦紹明の語録序文との関係性である。

伊藤氏は、独芳清曇の頂相の賛文について、独芳法嗣の霊昂の依頼であることがわかり、霊昂が遣明使の一行と乗船して入明したとされている。[45] では、この賛文の一ヶ月後の日付で書された季潭宗泐による南浦紹明の序文は、どのように考えることができるだろうか。

誰が南浦紹明の語録を持参し、季潭宗泐に序文作成を依頼したのかは不明であるが、先にあげた洪武七年六月乙卯に記された、「宗嶽」ら一行によったものではなかったかと推測したい。

「宗嶽」が誰であるのかを知ることは出来ないが、「宗」の字をもつ僧侶であることを考慮すれば、その系字を多く

持つ大応派の僧[46]である可能性を否定することはできないだろう。

また、先に述べたように、大応派僧らが入元、入明した際に、大慧派の僧にも歴参した者達が多くおり、その中には、この洪武七年、八年頃にまさに天界寺住持となっている季潭宗泐に参禅経験をもつ者達がいたことは無視しえないだろう。

季潭宗泐から序文を作成してもらったこと、また塔銘を撰したのが、季潭宗泐とは兄弟弟子たる用章廷俊であったことなどからすると、そのように考えてみたくなるのである。

日明交流の初期においては、義満が初めて送り出した遣明使等はもちろん、それらも含めて多くの参禅の徒が渡海しており、諸寺院を歴参し、また天界寺やその住持季潭宗泐との面会を目指して、いまだ自由に交流を行うことが出来ていた時期であったと思われる。

おわりに

日本禅僧と明の禅僧らによる交流の一端を見てみた。一三七〇年代において、それは比較的自由で活発であったといえる。

洪武七年（一三七四）の足利義満の第一回目の遣明使派遣は、国書をもっていなかったとして、受け容れられることはなかった。しかし、遣明使として乗船した禅僧等が、当時天界寺の住持季潭宗泐に対霊小参を修してもらっている点からは、日本の禅僧らに対する季潭宗泐の心配りが読み取れると同時に、遣明使として入明した日本僧等が、参禅の徒として天界寺では受け入れられた側面が伺える。そこからは禅僧としての彼らによる交流が行われていたといえる。

また、季潭宗泐に参禅した日本の禅僧等が、彼らの師などの語録や頂相への詩文作成を求め、季潭宗泐はそれに応えていることも注目すべき点であろう。

日明の国交の視点から見ると、派遣された禅僧等については、明における仏教界の頂点にたつ天界寺住持季潭宗泐と同門派である事が考慮されたとする指摘もあり、それは非常に重要な点であることは間違いないだろう。

一方で、禅僧たちは当該時期ではやはり参禅を目的とした行動をとっていたことも認められるのであり、そこでは、門派の別は厭わず、広く日本からの参禅の僧等を受け入れ、それに応えている。

こうした実態を知る鍵を握る一つが「宗嶽等七十一人」一行の存在であろう。「宗嶽」について、またその一行について詳細を知ることは難しい。しかし、洪武八年（一三七五）に大慧派の季潭宗泐が作成した南浦紹明語録の序文があること、そして彼がその語録を実際に読んだ上で作成したことを考慮することで、「宗嶽」等が南浦紹明の法孫にあたる大応派僧であり、季潭宗泐に序文作成依頼をしに入明したと考えることも可能となることを提示した。

さらに、この大応派が中国禅宗の松源派に連なる門派であることを考慮すると、胡惟庸の事件と関係性が浮かび上がってくる。上田氏は胡惟庸の事件を禅宗界との関係について、処罰された禅僧等の門派は松源派、破庵派の僧であり、その理由には、その門派が日本においては、博多の禅寺と関係し、また九州の南朝方の勢力とも関係性のある門派であったことを提示された。[47]

既に指摘されているとおり、大応派は九州博多や太宰府の寺院を拠点に展開していた門派である。[48] その大応派と明初期、特にこの事件以前の禅宗界、禅僧との接点を考慮するとき、大応派僧の中にも多くの入元、入明した僧らがいたことは看過できない。また、そのことを踏まえて考えてみると、洪武七年に「宗嶽」という名をもった大応派僧が入明した可能性も十分に考えられる。

胡惟庸の事件の以後では、明では大慧派が優勢となること、そして日本からの遣明使、国書の起草などに絶海中津

ら大慧派と接近する夢窓派僧が抜擢されることになる。[49] ここで見た事件以前に見られる交流からは、複数の禅宗門派が入明し、日明双方の禅僧達によって、自由で活発な文化交流があったといえるだろう。

註

（1）長谷部幽蹊「西域諸国への遣使」（『明清佛教教團史研究』「第二章　僧徒の内政および外交補弼」第二節、同明社出版、一九九三年）。

（2）田中健夫『前近代の国際交流と外交文書』吉川弘文館、一九九六年、西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』吉川弘文館、一九九九年など。

（3）伊藤幸司「日明交流と肖像画」（東アジア美術文化交流研究会編『寧波の美術と海域交流』中国書店、二〇〇九年九月）、「硫黄使節考」（『東アジアを結ぶモノ・場』勉誠出版、二〇一〇年）、「東アジア禅宗世界の変容と拡大」（川岡勉・古賀信幸編『日本中世の西国社会③　西国の文化と外交』清文堂、二〇一一年）など。

（4）橋本雄「室町日本の対外観」（『歴史評論』六九七号、二〇〇八年五月号。）など。

（5）榎本渉『東アジア海域と日中交流―九～一四世紀―』吉川弘文館、二〇〇七年など。

（6）上田純一『足利義満と禅宗』法蔵館、二〇一一年。

（7）川添昭二「室町幕府成立期の対外関係」（『対外関係の史的展開』第三章五、文献出版、一九九六年）。

（8）野口善敬「元・明の仏教」（『新アジア仏教史08中国Ⅲ宋元明清　中国文化としての仏教』第二章、佼成出版、二〇一〇年）、上田純一「僧録司制度」（『足利義満と禅宗』第三章）。

また、この事件の頃に日本からの入明僧達が雲南へ行った足跡があり、それに関して伊藤幸司氏「日明交流と雲南―初期入明僧の雲南移送事件と流転する「虎丘十詠」―」（『佛教史学研究』第五二巻第一号、二〇〇九年十月）、上田純一氏「雲南の日本禅僧たち」（『足利義満と禅宗』第四章）による研究がある。

（9）上田純一「日明国交回復への道」（『足利義満と禅宗』第一章）。

（10）西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』吉川弘文館、一九九九年。野口善敬『元代禅宗史研究』禅文化研究所、二〇〇五年。

（11）伊藤幸司「南京天界寺の故地」（『市史研究ふくおか』

第三号、二〇〇八年）。

(12) 村井章介『アジアのなかの中世日本』校倉書房、一九八八年。

(13) 橋本雄「室町日本の対外観」（『歴史評論』六九七号、二〇〇八年五月）。

(14) 野口善敬「元・明の仏教」（『新アジア仏教史08中国Ⅲ宋元明清 中国文化としての仏教』）。

(15) 長谷部幽蹊「西域諸国への遣使」（『明清佛教教團史研究』）。

(16) 無初徳始については、佐藤秀孝「入明僧無初徳始の活動とその功績―嵩山少林寺に現存する扶桑沙門徳始書筆の塔銘を踏まえて―」（『駒沢大学仏教学部研究紀要』第五十五号、一九九七年三月）によって詳細をしることができる。

(17) 「萬法語」（『大日本史料』第六編之四十）。

(18) 玉村竹二「建仁寺妙喜庵看寮子建浄業小傳」（『日本禅宗史論集 上』思文閣出版、一九七六年）。

(19) 村井章介「遣明使のメンバー」（『アジアのなかの中世日本』Ⅳ「日明交渉史の序幕―幕府最初の遣使にいたるまで―」四）。

(20) 長谷部幽蹊「西域諸国への遣使」（『明清仏教教団史研究』）。

(21) 伊藤幸司「日明交流と肖像画賛」（『寧波の美術と海域交流』）。

(22) 玉村竹二『五山禅僧伝記集成』（講談社、一九八三年）「独芳清曇」。

(23) 伊藤幸司「日明交流と肖像画賛」（『寧波の美術と海域交流』）。

(24) 「大応国師語録」叙文（『大徳寺禅語録集成』第一巻、法蔵館、一九八九年）。

(25) 玉村竹二『五山禅僧伝記集成』「南浦紹明」。

(26) 南浦紹明と虚堂智愚の交流について、偈頌に注目して考察された西尾賢隆氏「虚堂智愚から南浦紹明へ」（西山美香編『古代中世日本の内なる「禅」』勉誠出版、二〇一一年）の研究がある。

(27) 佐藤秀孝「虚堂智愚と南浦紹明―日本僧紹明の在宋中の動静について―」（『禅文化研究所紀要』第二十八号、二〇〇六年二月）。

(28) 「石城遺寶解説」（廣渡正利編著『石城遺寶』文献出版、一九九一年）。

(29) 「大応国師語録」（『大徳寺禅語録集成』第一巻）。

(30) 『妙興開山円光大照禅師行状』（『続群書類従』第九輯下）、『延宝伝燈録』巻第二十（『大日本仏教全書』仏書刊行会、一九一七年）。

(31) 『横嶽山前住籍』（『横嶽志 附 横嶽山前住籍』、崇福寺、二〇〇七年）第十五世大用宗任。

(32)「石城山宗系略伝」(『石城遺寶』)、『横嶽山前住籍』第十八世象外宗越。

(33)『横嶽山前住籍』第廿二世玉林宗璨、『延宝伝燈録』巻第二十（『大日本仏教全書』）。

(34)「大応国師語録」(『大徳寺禅語録集成』第一巻)、「圓通大應国師塔銘」(『続群書類従』第九輯上巻第二二九)。

(35)西尾賢隆「日中交流における大応の塔銘（上）」(『禅文化研究所紀要』第二十四号、一九九八年十二月。)、佐藤秀孝「虚堂智愚と南浦紹明—日本僧紹明の在宋中の動静について—」(『禅文化研究所紀要』第二十八号、二〇〇六年二月。)、榎本渉「一四世紀後半、日本に渡来した人々」〈H〉道元文信（『東アジア海域と日中交流—九～一四世紀—』吉川弘文館、二〇〇七年）。

(36)『増集続伝燈録』巻五（『新纂大日本続蔵経』第八十三巻、国書刊行会、一九八八年）。

(37)玉村竹二『五山禅僧伝記集成』「無我省吾」。

(38)無我の一度目の入元に関して、菊池武光の護送があり、南北朝期における南朝方菊池氏と関係があったことが指摘されている（上田純一『足利義満と禅宗』第五章）。

(39)『延宝伝燈録』巻第二十一（『大日本仏教全書』）、「無我省吾関係頌偈」(廣渡正利編著『石城遺寶』)。

(40)玉村竹二「日本禅僧の渡海参学関係を表示する宗派図」(『日本禅宗史論集　下之二』思文閣出版、一九八一年)。

(41)「石城遺寶解説」(『石城遺寶』)。また、季潭宗泐に関して、長谷部幽蹊氏「季潭宗泐傳の原資料」(『明清佛教教團史研究』同明舎出版、一九九三年)、佐藤秀孝氏「入明僧無初徳始の活動とその功績—嵩山少林寺に現存する扶桑沙門徳始書筆の塔銘を踏まえて—」(『駒澤大學佛教學部研究紀要』第五十五号、一九九七年三月)、同氏「季潭宗泐と『全室和尚語録』—『全室和尚語録』の紹介とその翻刻—」(『駒澤大學佛教學部研究紀要』第五十六号、一九九八年三月)の研究がある。

(42)『太祖実録』巻九〇　洪武七年六月乙未朔条、同年月乙卯条。

(43)村井章介「遣明使のメンバー」(『アジアのなかの中世日本』Ⅳ「日明交渉史の序幕—幕府最初の遣使にいたるまで—」四)、伊藤幸司「日明交流と肖像画賛」(『寧波の美術と海域交流』)など。

(44)田中健夫「中世における明・朝鮮・琉球との関係」(『対外関係と文化交流』思文閣出版、一九八二年)、上田純一「義満の遣使」(『足利義満と禅宗』第一章)。

(45) 伊藤幸司「日明交流と肖像画賛」(『寧波の美術と海域交流』)。
(46) 玉村竹二「禅僧稱號考」(『日本禅宗史論集　上』)。
(47) 上田純一「胡惟庸・林賢の謀反事件」(『足利義満と禅宗』第一章)。
(48) 上田純一「筑前博多への禅宗の流入と展開」(『九州中世禅宗史の研究』文献出版、二〇〇〇年)、伊藤幸司「臨済宗大応派の動向と室町幕府の外交姿勢」(『中世日本の外交と禅宗』第三章、吉川弘文館、二〇〇二年)。
(49) 上田純一「絶海中津と大慧派コネクション」(『足利義満と禅宗』第四章)。

〔付記〕本稿は平成二十二年(二〇一〇年)十一月二十七日、花園大学にて行われた第八十一回禅学研究会学術大会において報告した内容をまとめたものです。諸先生方に御教示いただきました。衷心より感謝申し上げます。